

牛久：学校周辺に見る自然

第34号 牛久二小

2020年7月24日発行

＜ 夏（梅雨）の生きもの観察 ～バッタのなかま ＞

こんにちは。7月もあと1週間ですが、なかなか梅雨が明けませんね。小雨が時々降る中、牛久二小4年生と校庭の生きもの観察をしました。テーマは「夏らしい自然を見つけよう！」気温は26℃、湿気か雨がシャツはだいぶぬれていました。今回はその中から、バッタのなかまを紹介합니다。



ショウリョウバッタの幼虫（ようちゅう）。どこにいるか、わかりますか？

今回もいろいろ見つけてくれましたが、特に多かったのはバッタのなかま。それも、大部分はまだ幼虫でした。中でもショウリョウバッタはビオトープ手前の草むらでたくさん見つか、成虫も少ないながら見つけてくれました。おもしろいのは、緑色のものと褐色のもの、もようが入ったものなどいて、また、体が大きくても幼虫だったり、逆に小さくても成虫だったりしたこと。幼虫と成虫の見分け方は、おぼえていますか？羽を見ると、分かるのでしたね。羽が腹の先の方まで大きくのびているのが成虫、いくらものびずに腹のふしのしまもようが見えているのが幼虫でした。さて、上の写真でどこにいるか、見つけられましたか？



ショウリョウバッタの幼虫（ようちゅう）。それぞれ、前の写真のアップ。

草の中に入られてしまうと、なかなか見つけるのはむずかしいですね。そんな時は、足で草をかき分けるとパッと飛び立つので、それを追いかけるといいでしょう。アップの写真を見ると、羽はいくらものびてないですね。なので、これらはどちらも幼虫です。同じ緑色でも、黄緑に近いものから緑のこいものまでいろいろでしたね。



大型のショウリョウバッタ幼虫(左)と、もよう入りの褐色型幼虫(右)。どちらも羽は少しで、腹のしまようが見えている。

左の幼虫はかなり大きかったのですが、やはり幼虫です。すね。シャツにしっかりしがみついていた。右の幼虫は褐色で、もようも入っていましたが、これもショウリョウバッタです。色やもようは違っても、体の形は全く同じですね。



ショウリョウバッタの褐色型成虫(左)と大きな緑色型成虫(右)。

こちらは成虫。やはり褐色型と緑色型がいますが、どちらも羽が大きくのびていますね。緑色型の方は、前のシャツにしがみついている緑色型幼虫の写真のものと同じくらい大きさでした。大きさの違い、色やもようの違いは、何が原因で、どのようにして生まれるのでしょうか？



ショウリョウバッタくらべ。右は、アブラゼミのぬけがら。



体長 1センチメートルにも満たないマダラスズのめす(左)と、そのアップ(右)。

こんな小さなコオロギの幼虫？と思ったら、マダラスズでした。1 cmにも満たない小さな体ですが、これでも成虫です。コオロギに近いなかまで、同じコオロギ科にまとめる説と、別のヒバリモドキ科に分ける説とあるようです。



近くに、今度は大きめですが幼虫の、コオロギがいました。羽がのびていません。体のまん中あたりに白い横線があるのが見分けのめじるしで、エンマコオロギです。よく見ると、顔もやはりエンマコオロギですね。

エンマコオロギの幼虫。体のまん中あたりの白い横線が、見分けのめじるし。



最後に、クビキリギスの幼虫。成虫は口のまわりが赤いのですが、幼虫ではまだ赤みは出ず、ほかのなかまとの見分けがむずかしいです。それにしても長い触角ですね。

写真はありますが、ほかにクルマバッタ？トノサマバッタの幼虫も見つかりました。バッタの幼虫の共通点は、羽がのびてないこと。

【理科支援員：宮内】

クビキリギスの幼虫。